

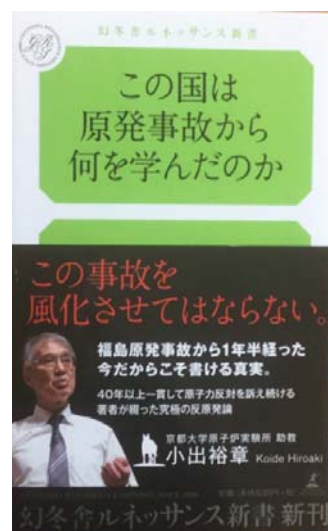
この国は原発事故から何を学んだのか

まもなく東日本大震災・原発事故から5年が経つ。何事もなかったかのように、川内原発に続き、高浜原発も再稼働された。安倍政権のもとで。あの過酷事故のあと、原発関係の本を買い集めて、大学のセミナー室においた。その一つが表題と写真の小出裕章さんの幻冬舎ルネッサンス新書、2012年9月である。久しぶりに再読した。付せんをつけた箇所だけでも紹介しよう。

・福島第1原発事故は未曾有の人災であるにもかかわらず、警察の捜査が入らないのは不思議です。---- 何十万、何百万もの人を被曝させた「犯人」たちは、何の罪も問われないまま、いまだに原子力を推進しようとしています。このままでは、原子力ムラは無傷のまま生き延びることでしょう。住民たちに東電が支払う賠償にしても、最終的には国民が負担するという話にすぎません。

・もともと、大量の電気は東京などの大都会で消費するもので、どうしてもそれが必要だというのであれば、原発も都会が引き受けるべきです。自らが引き受けることのできないリスクを抱えた機械を他者に押し付けること、そのこと自体が差別です。これまで日本の原発で生じた被曝の96%は、下請け労働者が背負わされてきました。今まさに福島第一原発は、事故収束のための被曝作業が続いています。被曝を受け持っているのは下請け、孫請け----7次、8次と続く請負体制の最下層の労働者たちなのです。私たちは、原発が生み出す放射性物質を無毒化する手段を持たないまま、今日まで原発を続けてきてしまいました。その毒物は、100万年続くほどのもので、私たちはそれを子々孫々に押し付ける以外にありません。そんな私たちの選択に何ら異議を述べる機会を与えられない子々孫々が、毒物だけを押し付けられるのを、私は黙って見過ごすことなどできません。

・皆さんは原子力の専門家ではないかもしれませんが、それぞれの生活の場においては専門家であると思います。その力を存分に発揮していただければと思います。大きなりんご園であっても、皆さんのりんごの木からは皆さん一人ひとりの、私の木からは私だけの実が成ります。誰もが一本のりんごの木であり、同じ実の一つとして成ることはありません。どの実も大切な個性です。子育てをするお母さんは子育てを通じて、ビジネスパーソンはビジネスを通じて、職人さんは物作りを通じて、そして芸術家は芸術を通じて、ご自身の活動を通して、その能力と個性によってできることがあるはずです。それぞれが自分の生活の場から「反原発」「反差別」を発信してくれるようになれば、きっと原発は止められるし、いつか社会は変わるだろうと思います。



(2016年2月6日)